中国歴史地理国際学術討論会に出席して

米　倉　二　郎

1．学　　会

中国の伝統的地理学は歴史地理学で，地理学者のほか歴史家の中に研究者が多い。杭州大地理系の陳橋駅教授を名誉会長，益陽師専歴史系の張歩天副教授をオルガナイザーとして上記のシンポジウムが4月20日から27日にわたって湖南省長沙市の湖南師範大学で開催された。主題は中国歴史地理研究の新成果の国際的交流，華中・華南とくに洞庭湖沿岸などの地域文化の研究，譚其驤・侯仁之・史念海3先学の60年にわたる研究を顕彰記念することにあった。寄せられた論文103篇，出席者内外百数十名，うち日本からは筆者のほか九州国際大の山下豊治，東北学院大の谷口満両君であった。出席者一同学内の賓館に宿泊，校門前通りに新設された長沙図書館の講義室を会場とした。

20日開会式。演壇中央に陳会長，向かって左に史念海教授，右に筆者，そのほか師範大学長，党組書記などで，開会宣言，歓迎の挨拶などが述べられた。午後は3先学および陳会長の愛弟子らによる顕彰講演が行われた。

21日は発表会で，午前に史念海教授が三国志および晋書列伝人物の出身地分布を論じ，午後には筆者が長江流域と恒河流域とを歴史地理的に比較した。また山下君は即席に英語で挨拶を述べられた。そのほか発表が相ついで行われたが，質問や討論はすべてあとで一括して行われる事になった。22日午後も発表会で，谷口君が蘇州都市の起原について中国語で論じた。

配布された論文集（発表要旨集）によれば各時代の歴史地理をとりあげたものが大多数で，古都について7篇，政治区画と地名について各6篇，古地図・古地志について6篇，軍事・交通・水利など4篇，農商業3篇であった。地域について見れば，洞庭湖沿岸の湖北・湖南が10篇，華南8篇，江南6篇であったが，華北も10篇，西域も3篇あった。方法論などの一般論は10篇で，うち人物論が5篇であった。発表は口述のみで，地図・写真・スライドなどの展示は一切なかった。ただし，発表全文をプリントしたもの20余篇が配布された。最後に干希賢北京大教授が閉会の辞をのべられた。中国歴史地理学の今後の発展を祈念され，2年後にこの会を北京で開催することを予告された。なお，筆者の出席に対しとくに謝意を表されたことは恐縮の至りであった。

2．見　　学

21日午前，長沙の湖南省博物館をまず見学した。同博物館には，近くの馬王堆漢墓の出土品が展観されている。四重の棺框は八畳敷位かと思われる大きさで，カイロ博物館のトータンカーメン王のそれよりさらに大きいかと思われた。その中に納められていた軑侯夫人のミイラは完全に保存された為に全身に潤沢さがあり，先般わが国で開かれた楼蘭王国と悠久の美女展の婦人よりも一層美人であったろう。

同日午後は岳麓山麓に岳麓書院を尋ねた。中国四大書院の隨一で，全国重要文化財，宋の咸平4（1002）年創建，歴代の重修を経て1000年の伝統を現在の湖南大学に伝えている。域内はさすがに清浄に保たれ，

かつて此処に講学した朱熹の書という「忠孝廉節」の大文字が講堂壁に埋められている。裏門を出て渓流をさかのぼると緑蔭深きところ愛晩亭に至る。遊覧の旅行客が多かった。

3．巡　検

23日からは湖南師範大翟甫東教授をリーダーとして3台の大学バスに分乗し，湘西地方の巡検に出発した。はじめ湘江に沿って北上，やがて洞庭湖南辺の平野と丘陵が参差するところに農家が散在する，いわゆる水村山郭を縫って西した。道でトレーラーによく出合ったが，田植機などはまだ入っていない。水田に水がはられて田植が始められていた。

益陽は工業都市として発展しつつある。益陽師専で歓迎され，昼食をご馳走になった。

午後はさらに西して常徳に至る。これから沅江とその北を流れる澧水に沿って武陵山地に入る。石灰岩地帯の始まりで，行く手に南画で見るような突兀とした山容が現れた。山腹を削って石灰石の採取が行われていた。さらに山地に入ると，円形の谷壁をもつ耕地が山間に連なっている。これは石灰石の溶解によって生じた円形の窪地，いわゆるドリーネ・ウバーレが耕地化されたものである。この山地は西南の貴州省に続いており，少数民族苗族の居住空間で湘西苗族自治区となっている。

夕方，澧水の支流溇水に沿う武陵源という観光中心地に到着した。この地域一体500㎢が中国重点風景名勝区に指定されており，この町には公共機関や組合等諸団体の宿泊施設のほか，最近では民間資本のホテルなどが集まっている。中国の楼閣作りの武陵賓館に泊まった。外観は立派であるが，水洗トイレなどメンテナンスにやや欠けるところがあった。

24日は近くの石灰洞窟黄龍洞を見に行った。折悪く有毒ガスが噴出中で，入洞を中止して宝峰公園にまわる。石灰岩・砂岩の奇峰と山間の堰止湖を見物，胸を衝く急坂を山下君の好意で轎に乗って山頂に達し，奇峰をめぐらした武陵源の河谷平野を下瞰した。

午後はこの名勝区に西接する張家界国家森林公園を探勝した。金鞭渓と名付けられた峡谷を約8㎞歩いた。この命名の基となった金鞭岩は直立100mを下らぬ奇峰で，旭日に輝けばあたかも金の鞭の如しという。これと並ぶ奇岩尖峰が流れに沿って次々に聳立している。谷深く陽光を遮ぎるので樹木の発育が抑えられているが，多くの珍種も遺存しており，森林公園として保護されている。その夜は張家界の立派なホテル湘電山荘に泊まった。わが国の一流ホテル並みの設備で邦価2000円位で泊まれるとはまったく有難かった。

25日，われわれ日本人3名は帰途の空便の都合で一行と別れ，中型バスで長沙師範大まで送っていただいた。

26日，長沙空港発香港経由で帰国した。事務局長の張歩天氏に多忙の中わざわざ空港まで見送りいただいた。中国にはやはり敬老尊師の伝統が生きていた。

4．書　籍

学会中多くの中国学者の知己を得た。ここでは恵贈いただいた書籍と著者名のみを記して紹介かたがた御礼申し上げる。

- 湖南師範大地理系　何業恒教授：中国珍稀獣類的歴史変遷，1991。
- 益陽師専歴史系　張歩天副教授：歴史地理概説，1993。中国歴史地理　上・下冊，1987・1988。中国歴史文化地理，1993。洞庭歴史地理，1993。
- 中国社会科学院歴史研究所　曲英杰：先秦都城復原研究，1991。河洛史志，1993。
- 北京大　干希賢教授：北京大学学報（歴史地理学専刊），1992。
- 湖南省社会科学院歴史研究所　伍新福所長：苗族歴史探考，1992。
- 西南師範大歴史系　藍勇副教授：南方絲綢之路，1992。